

第1学年1組 生活科学習指導案

第2校時 場所 1年1組教室 指導者 芦原 玲子

1 単元名 ねんちょうさんとなかよし大きくせん！～たのしいあきいっぱい～

学校の中で最年少である1年生は、他学年と比べると知らないことやできないことが多かったり、自己中心的に物事を考えてしまったりするところがある。そのため「お世話しなければいけない対象」という見方をされることが多く、実際の関わり方を見ても、やってもらったり教えてもらったりすることが多い。しかし、子どもたちは「自分でやりたい」「役に立ちたい」という強い思いがあり、たくさんすることに興味をもっている。一方の年長児は、幼いながらも幼稚園ではリーダーとしての役割を担っており、行事等では全体に関わる仕事を任されることもある。反面、特定の子どもたちとしか関わろうとしなかったり自分の思いを言葉にできなかったりする。

そんな子どもたちが関わることによって「お世話する・される」関係にとどまるのではなく、よりよい関係を築いていけるようにしたい。特に、年長期（5歳児）から小学校1年生までの2年間は「架け橋期」としてされており、幼児教育と小学校教育の連携の必要性が求められている。幼児期からの子どもの成長を切れ目なく支える視点や社会性の素地を育てていく点からも、継続的な関わりを通して相手のことを思いやる大切さに気付いたり自分や相手の成長を実感したりすることは重要であると考えられる。

2 単元について

- (1) 本単元は、年長児との継続的な関わりを通して関係性を築いていく中で、相手の立場に立って考えることや互いに歩み寄ることの大切さを感じ、自分自身の成長とともに相手のよさに気付くことをねらいとしている。

入学して以来、子どもたちは6年生との関わりはあるが、年齢差があるため「お世話する側とされる側」になっていることがほとんどである。また、普段の子どもたち同士の関わりを見ていると、相手の気持ちを考えずに自分の意見を一方的に押し付けてしまうことも少なくない。そんな子どもたちが年長児と関わっていくことは、関係性を築く大切さや社会性を身に付ける上でも有意義なことと考える。

今回、活動内容として秋の遊びを設定する。一般的な単元の流れとしては、葉っぱや木の実など秋の自然の物を探した後、それらを生かした遊びをつくり、実際に遊んでたのしむというものになっている。年長児と交流する場合は、遊ぶ場面に招待していっしょに遊ぶということが多い。しかし、それでは表面的な交流にとどまってしまう可能性がある。そこで、継続的な年長児との関わりの中で秋の遊びを設定することによって、年長児という明確な相手意識をもちながら「どうすれば年長児にたのしんでもらえるか」試行錯誤を重ねていく子どもたちの姿を目指していきたい。

- (2) この時期の子どもたちの課題として、道徳性や社会性の芽生えとなるような遊びを中心とした体験活動に取り組むこと、集団や社会のルールを守る態度や規範意識の基礎を形成することなどが重視されている。そんな子どもたちが継続的に関わることによって、自分の気持ちや要望を押し通すだけではよい関係は築けないことや思いに耳を傾けることの大切さに気付くことができるのではないだろうか。そうした気付きを得て関わり方を模索していくことによって、人と関わることを肯定的に捉えたり人と関わる楽しさやおもしろさを感じたりすることができる。そうした経験は社会性の基礎となるものであり、「自分のしたことで喜んでもらった」「役に立つことができた」という自信や達成感を感じることへとつながる重要なものである。

- (3) 本単元に関する子どもたちの実態は次の通りである。(調査人数36人)
- ① 人と話したり遊んだりすることがたのしいと感じている子どもは、33人であった。
 - ② 普段、兄弟以外の異年齢の子どもたちと遊ぶことがある子どもは、3人とどまった。(6年生は除く)中には「まったく関わりがない」という子どもたちもいた。
 - ③ これまでに、全員の子どもたちが木の実や紅葉した葉っぱなどの秋の物を使って遊んだ経験があった。

3 単元の目標

- (1) 秋の物を使って遊びをつくったり遊んだりすることで、そのおもしろさや自然の不思議さに気付くことができる。
- (2) 年長児のことを考えながら、秋の遊びを試したり工夫したりしている。
- (3) 秋の物を使いながら、年長児がたのしめるような秋の遊びを創り出そうとしている。

4 指導計画(17時間取り扱い)

時	学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法等
1 ・ 2	1 身近にある秋の物を見付ける。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 休み時間に木の実を集めている子どもたちの姿を見取り、学校にはどんな秋の物があるのか投げかけることで秋に興味をもてるようにする。 ○ 「きれい」「おもしろい」と、見付けた秋の物に対して発言している子どもを価値付け、色や形、大きさ、触った感じなど特徴に目を向けられるようにする。 	<p>【主】木の実や落ち葉など秋の自然の物を進んで見付けている。 (観察・発言)</p> <p>【知】見付けた自然の物の不思議さやおもしろさに気付いている。 (観察・発言)</p>
3 { 15	2 秋の物を使った遊びを考える。 (1)秋の物を使ったおもちゃをつくる。 (2)秋の物を使った祭りを開く。	<ul style="list-style-type: none"> ○ どんぐりでこまや車をつくっている子どもたちがいることを年長担任から紹介してもらい、子どもたちが「秋の物を使って、みんなで楽しめるようにしたい」という思いがもてるようにする。 ○ 子どもたちが持ってきた材料や制作に関係する道具等は常時教室の内外に置いておき、必要に応じて使えるようにしておく。 ○ 「年長児がたのしめるものになっているか」という視点をもたせることによって、自分たちの考えた遊びを見直したり改良したりすることができるようにする。 	<p>【主】木の実や落ち葉や身近にある材料を使って、遊びをつくろうとしている。 (観察・発言)</p> <p>【知】木の実や落ち葉などを身近な自然の物や材料を使って遊べることに気付いている。 (観察・制作物)</p> <p>【思】「たのしく遊べるようにしたい」という思いをもち、遊びをよりよくしようと試行錯誤している。 (観察・制作物・ノート)</p>
16 ・ 17	3 これまでの活動を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ どのような遊びを考えて、その中にどのような工夫をしていたか視点を与えることで、年長児がたのしく遊べることができたか振り返るようにする。 	<p>【思】自分たちの遊びの工夫を想起したり年長児の姿を考えたりしながら、振り返っている。 (発言・ノート)</p>

5 本時の学習

(1) 目標

秋のお祭りに向けて準備を進めていく中で、年長児がたのしめるものになっているのかという視点から遊びを見直すことができる。

(2) 展開

時間	学習活動	学習する子どもの思い・姿
5	1 前時までの学習を振り返る。	<ul style="list-style-type: none"> ○ どんぐりの迷路とくじ引きをつくっている。 ○ どんぐりのけん玉をつくったけれど、あんまりうまくいってないな。 ○ 「やってみておもしろい」「やってよかった」って思うのがたのしいじゃないかな。 ○ 「何回もやりたい」って思うのがたのしいってことだと思ふ。簡単過ぎたり難しかったりすると、年長さんはやりたくないかも。
20	2 グループで準備していたゲームやおもちゃなどを見直す。	<ul style="list-style-type: none"> ○ どんぐりのけん玉のどこを変えると、もっと入りやすくなるかな。ひもの長さを変えてみるといいかな。他にけん玉をつくっていた人に聞いてみよう。 ○ 迷路をつくったけれど、あそこのグループの迷路はおもしろかったな。どうするともっとおもしろくなりそうかな。 ○ 食べ物屋さんにして、おだんごや綿菓子をつくっているけれど、〇〇くんと〇〇ちゃんはたのしんでくれるかな。本当に食べられる訳じゃないから、食べるまねをして終わっちゃうかも。
15	3 話し合ったことや変えたところ、やろうとしていることを発表する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ どんぐりのけん玉なんだけれど、やっぱり年長さんには難しすぎるかなと思って、ひもの長さを変えることにしました。それから、カップの数を増やして、玉が入りやすくするといいいかなと思います。 ○ ぼくたちの迷路はちょっとつまんなかったから、もっとコースを長くしたり障害物があったりするようにしたいと考えています。 ○ おだんごとか綿菓子とか食べるまねをするだけになっていたから、お金を払ってお買い物ができるようにすると、〇〇くんたちも喜んでくれるんじゃないかなと思います。
5	4 やって来たことや考えたことなどを「大きくせんノート」に記入する。	<ul style="list-style-type: none"> ○ 「わたしたちのチームは、ねんちょうさんがたのしめるようにルールをかえることにしました。〇〇ちゃんにたくさんあそんでもらいたいです。」 ○ 「おもちゃをつくったけれど、どうやってあそぶかはきめていませんでした。きょうそうみたいにすると、もっともりあがるんじゃないかとおもいます。」



これまでに複数回幼稚園を訪問し交流する中で、互いのことを知り少しずつ仲よくなっています。そんな中、子どもたちは「秋のお祭りをして年長さんといっしょにたのしみたい」と考えています。これまでにはつくることに夢中になっていましたが、本当に年長児もたのしめる内容になっているのか見直していきます。

主体的・対話的で深い学びを生み出す教師の支援（発問・指示・教具・評価）

- 秋のお祭りに向けて、どのような準備を進めているのかを尋ねる。その中で、「年長さんにたのしんでもらいたい」といった「大きくせんノート」での子どもの記述やそれまでの子どもたちの姿を取り上げ「本当に年長さんがたのしめるようになっているのか」問うことによって、立ち止まれるようにする。その上で、次の課題を設定する。

【教材・教具】

- ドキュメンテーション
- 大きくせんノート

ねんちょうさんがたのしめるようにしよう

- 「たのしむ（たのしい）」とはどういうことをイメージしているのか尋ねて、全員で意味を確認した上で、それぞれのグループごとの活動に入る。
- 道具や材料そのものの工夫、遊び方等の視点から、自分たちが考えてきたことや準備してきたことをよりよくするにはどうすればいいか尋ねるようにする。「自分たちは十分だ」と考えていたり迷ったりしているグループには、他のグループに試してもらったときのことを想起させ、さらによくする方法や付け加えることはないか尋ねることで考えがもてるようにする。
- 互いに遊びを試した中で、「たのしかった」と感じたグループを見に行った子どもにどのような工夫があったのか尋ねたり、子どもたちが持っている「大きくせんノート」を確認するよう声かけしたりすることで、遊びをよりよくするための方法が考えられるようにする。
- 考えたことや気付いたこと、疑問、必要だと感じたことなどは適宜大作戦ノートに記入をして、話し合う際やもう一度考える際の手がかりとして活用できるようにすることで、グループで共有したり次時へ生かしたりできるようにする。
- 発表の際に、これまでしていたことや考えていたこととこの時間で変わったこととを比較させその理由を問うことによって、年長さんに対して働いた意識が分かるようにする。また、まだ悩んでいるグループがある場合には、どんなことに難しさを感じているのか、どこを悩んでいるのか尋ねることによって、次時へとつながるようにする。
- 本時のめあてである「ねんちょうさんがたのしめる」ということに現時点でどれだけ近づいたか尋ねることによって、できた部分ともっとよくしたい部分に目が向けられるようにする。
- 子どもたちから出た振り返りを取り上げ「よりよい交流にしよう」と努力していることを認める。その上で、さらによくなると年長児も子どもたちもみんな嬉しくなることを伝え、交流への意欲を高めるようにする。

【教材・教具】

- ともだちコーナー
- おしらせボード
- 大きくせんノート

【評価】

年長児がたのしむことができるかという視点に立ち、自分たちのチームの遊びを見直したり変えたりしている。
(大きくせんノート、制作物)